中村草田男論　俳句に見られるChristianity 2

中　島　賢　介

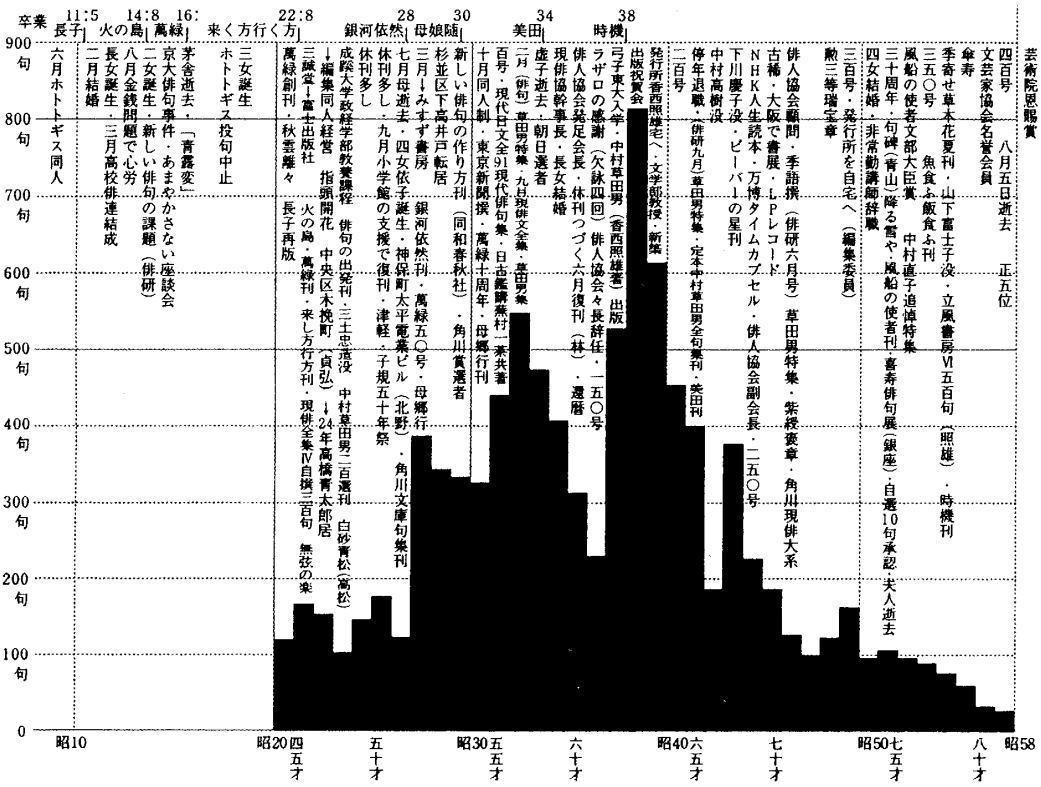
はじめに

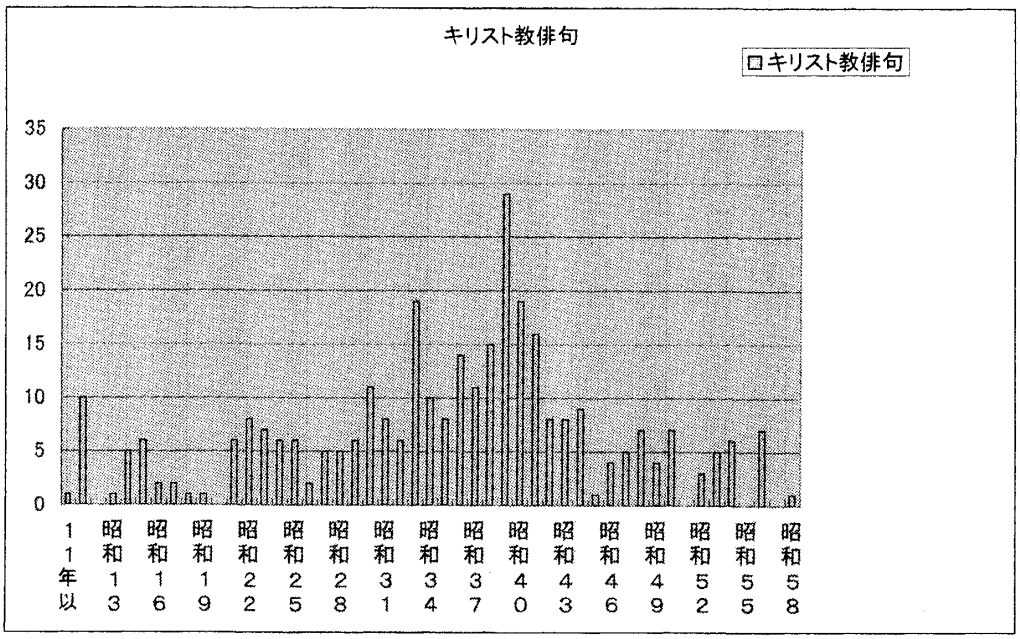
今回は、前回抜粋した中村草田男のキリスト教俳句について、数量と内容の両面からの考察する。数多い先行研究の中で、泉紫像氏が『中村草田男』[1]で調査した発表年間句数をグラフ化したものがある。それを引用するとともに、前回抜粋したものをグラフ化し、その相関関係について考察したい。

また、内容面においては、「祈り」に関する句と、「謝す（謝意）」に関する句について、その内容を検討していく。その過程において、ドイツのキリスト教神秘主義的宗教詩人アンゲルス・シレジウスの『ケルビムのごとき旅人』[2]（Angerus Silesius: Cherrbinischer wandersmann）のエピグラムを引用し、その内容の類似性を指摘しながら考察する。

1　キリスト教俳句の数量的考察

まずは、先ほど紹介した泉氏が作成したグラフと、論者が作成したグラフを示す。





グラフに関する注釈

前回抜粋したキリスト教俳句に加え、宮脇氏が著書の中で触れた句について、キリスト教と特に関連性の高いものを加えてグラフにした。

泉氏は、年間発表句数をグラフ化することについて、「年間発表句数だけを数えて、それが好調不調を判断する基準であるとするのは極めて危険であるが、しかし、それは少くとも意欲とか意気込みとか熱意とかを示すバロメータにはなるだろう。」[3]と述べている。確かに、好不調の波にこのグラフを使用するのは論外だ。だが、キリスト教に関して言うと、氏のいう「意欲」などに対応するのは、キリスト教との距離感であり、その距離感はこのグラフによってある程度把握することができる。ちなみに「青畝・静塔・草田男比較俳句論」[4]なる拙論では、年譜と句数の多少の関係から発表句数との関連性は非常に高いことを指摘したので参照してほしい。

２つのグラフを重ね合わせると、年間総発表句数とキリスト教俳句数の波はほぼ同じように推移している。だが、よく見るとキリスト教俳句の句数は、年間句数より減少の度合いが少ないことに気付くであろう。先行研究では、宮脇白夜氏が『中村草田男論　詩作と求道』[5]において、彼の人生を時系列で表わすと、「求道以前」「求道の模索」「求道の深化」に分かれるとすると指摘しているが、晩年の句数から察すると、これが「求道の深化」の時期であるといえる。長年俳句界を牽引し、論争に明け暮れた時期もあったが、晩年彼は全身全霊をもって独自の作句活動に傾注するのである。この時機にキリスト教俳句が減少しないということは、独自の作句活動とキリスト教への接近とが無関係ではないことを裏付けている。

2　俳句とキリスト教神秘主義思想との関連

浅見洋氏は、著書『西田幾多郎とキリスト教との対話』[6]で、西田幾多郎が山口高等学校、第四高等学校教授時代に参禅しながらキリスト教や浄土真宗に関する書物に深い関心を持っていた事

実を指摘している。この論の中で、氏は西田が第四高等学校教授時代に俳句の創作をしていた事実に言及する。西田は哲学を構築する上で、宗教や芸術を直接経験する必要があり、その手段として参禅や俳句を創作を選択したというのである。この指摘は、キリスト教俳句にとって、とても重要な意味がある。日本の禅とキリスト教神秘思想が比較研究されて久しいが、その類似性は主に西田の弟子達によって分析研究されている。この一連の研究史の根源である西田と神秘主義思想への共鳴が、氏の論で実証されているからである。

芸術の経験（俳句の創作）
宗教の経験（参禅、聖書）
→ 直接経験 → 西田哲学の構築

芸術の経験（俳句の創作）
主客合一
宗教の経験（聖書、教会）
→ 直接経験 → 草田男キリスト教俳句

西洋の神秘思想作品の中で、俳句のような短詩といえば、もともと墓碑銘などに使用されていたエピグラム（寸鉄詩）である。アンゲルス・シレジウスは、もともとプロテスタントとして信仰生活を送っていたが、医学を学ぶために、オランダのライデンに移住した際、アブラハム・フォン・フランケンベルクに出会い、ヤコブ・ベーメの神秘思想に触れる。感動したシレジウスは、エックハルトやタウラーなどの思想にも深い感銘を示し、『ケルビムのごとき旅人』という詩集を上梓する。そしてついにカトリックに改宗する。自分の直接体験をエピグラムという短詩形式で表現したことによって、俳句において主客合一を計る中村草田男のキリスト教俳句との類似性が確認でき、エピグラムから句に関する考察が可能になってくる。

3　聖書・キリスト教の祈り

祈りに関して、筍吉の「キリスト教俳句の題材」[7]では、「祈祷」としてまとめられている。

祈祷　　祈。お祈。【参照】祈祷書。ミサ。主祷文。天使祝詞。信徒信経。お告げの鐘。十字架の道。ロザリオ。

解説　　ここではキリストと信仰者との対話。祈りの目的は、一神の讃美、二神への感謝、三罪の赦しと御恵みとの願い。心で誦える黙祷と言葉で現す声祷。

しかし、残念ながらこれだけでは説明が不十分であるといえる。それを補完するために辞典引用すると、新キリスト教辞典[8]には、祈りの第４の目的に「神に導きを求める」という項目が加わっている。更に、キリスト教神学辞典では、「祈りの神学」の項で、「祈りは常に共同体的なものであ

る」「祈りは完全な自己献身をもたらす自己忘却である」「生涯のうちのある時点において、祈りたいという強い願いを、思わず持ってしまうことがどうしても避けられない」キリスト教の祈りの特徴を端的に述べている。

祈り（das Gebet）は、隣人愛を説くキリスト教においては、究極的に共同体においてなされるものであり、隣人に何かせざるを得ない状況下においてなされるものである。また、祈りによって自分がしてきたことを省み、これからなすべきことを確認するためのものである。更に、神によって与えられているものを感謝し、その賜物をいかに使うべきかを積極的に問う行為が祈りであると考えられる。

また、聖書においては、弟子の一人がイエスに祈りについての教えを請う場面がある。イエスは、そこで一つの祈りを具体的に提示する。いわゆる「主祷文、主の祈り」である。前半に神と人間との関係、後半に人間同士の関係について、イエス自身が弟子たちに語ったものである。

4　ニーチェの祈り

草田男は、第四句集『来し方行方』の巻頭に、『ツァラストゥストラはこう言った』[9]を著したフリードリッヒ・ニーチェ（Friedrich Nietzche）の「われわれは祈願する者から出て、祝福する者にならなければならない」という言葉を引用している。草田男は『ツァラストゥストラはこう言った』を原語と和訳で数十回読むほど耽読していたが、これは自己超克を唱えるニーチェの思想を表明したものである。戦後、家族に連れられて再び教会に通うようになってからも、ニーチェへの思慕は止むことがなかった。『ツァラストゥストラはこう言った』では、祈りについてこのような記述がある。

Denen sehe ich in's Auge, —— denen sage ich es in's Gesicht und in die Röthe
Ihrer Wangen: ihr seid Solche, welche wieder beten!

Es ist aber eine Schmach, zu beten! Nicht für Alle, aber für dich und mich und wer auch im Kopfe sein Gewissen hat. Für dich ist es eine Schmach, zu beten!

Du weisst es wohl: dein feiger Teufel in dir, der gerne Hände-falten und Hände-in-
Den Schoos-legen und es bequemer haben möchte:—— dieser feige Teufel redet dir zu „es
Giebt einen Gott!

すなわち、再び祈ること（wieder beten）を恥ずべきこと（Schmach）だと考え、もはや祈りによって受動的に依存するのではなく、神と人間という関係を断絶した上で自分を独立させて考えなければ自分を高められないとニーチェは主張する。

また、『悦ばしき知識』[10]において、ニーチェは「祈祷」を「もともと自分なりの考えをすこしも有（も）たず、魂の昂揚というものを知らないか、あるいはそうしたものが気づかれないままに過ぎ去るような人間たちのために、考案されたものだ」としている。そして、念仏やヴィシュヌ神ア

ラー神を一定回数唱えたりといった教祖または信者によって規定された「祈り」、つまりキリスト教でいう「主の祈り」を「自分なりの考えや魂の昂揚を知っている篤信家のためを慮って考案されたもの」であるとし、このような美辞麗句や機械的反復による快感を催すと主張している。
この魂の昂揚を知らない者と気づかない者との両面からの言及によって、彼は祈りを徹底的に非難する。ニーチェは、当時のヨーロッパを席巻していた知識人階級のニヒリズムに対峙し、超えるものは自分自身であるとする「自己超克」を提唱した。まず「神は死んだ」と証言することで、絶対者の存在を徹底的に排斥した。その後、神に変わった人間が自己目的化すること、すなわち自分が他者を支配し抑圧することを阻止するために、徹頭徹尾自己認識に集中し、「永劫回帰」を体現することで「自己」が超越される。彼は、いくつもの価値転換を図ることで、この超越された存在「超人」を生み出す。この過程において、「死んだ神」への祈願する者を非難したのである。

5　草田男の祈り

草田男の祈りを考えるためには、彼の思想遍歴を追ってみることが必要である。彼の日記から、神経衰弱に悩まされ県立松山中学校を休学している間に、「バイブルを読む」[11]と記していることから少なくとも1919年（大正８年）以前に聖書との出会いがあったと考えられる。その頃、聖句を読み「偉大なヤソの心には、偉大は悲痛が宿つて居た事を知つた。」「又悲しくなつたので、二階へあがつてバイブルを読む」などといったことを経験する。その翌年復学した彼は、従兄弟で西田幾多郎の愛弟子である三土興三に『ツァラトゥストラはこう言った』を薦められる。その後先述した通り、数十回も読み直すことで、この書物が草田男の生涯を支えることになる。こうした経緯を踏まえて「祈り」について、句集の跋文や巻頭にニーチェのアフォリズムを見る。

私はニイチェと共に、「價値轉換の車輪のハンドルは、此世の最もものしづかな個所に於て、最も素朴なる忍苦の手に依つて回轉せしめられる」ことを固く信ずる者である。[12]

われわれは　祈願する者から出て　祝福する者にならなければならない。[13]

この時点では、俳人草田男は、ニーチェ思想をそのまま自己の句作の指針に応用している。「祈り」に関しても同様で、「祈願する者」という絶対者服従の態度から祝福する者へと昇華しようと志す彼の姿勢を物語っているといってもよい。他の箇所でも度々使用される「自己」や「必然」などの語の使用にもニーチェ思想が色濃く現れている。祈り」についての問題に限定すると、祈るという行為について、彼はニーチェほど否定的であったかどうかを考えてみなければならない。

宮脇白夜氏は、自著『中村草田男論』において、「求道以前」「求道の模索」「求道の深化」とキリスト教への求道の過程を時間的に捉えている。氏によれば、1962年（昭和37年）二度目の神経衰弱が俳人協会会長の任に当たっていた草田男を襲った。職を辞した翌年の1963年（昭和38年）以後、ニーチェに関する句が見られなくなった。これらのことから、神経衰弱や第一線から退いたとほぼ

同時にとから彼のニーチェへの傾倒が終焉したということができる。ということは、これから考察する草田男の「祈り」に関する句についても、1962年1963年を境にして前半と後半とでは内容が異なっているということが考えられる。

6　祈りに関する句

以上のことから、1962年前後のものを区別して、祈りの句を併記すると次のようになる。

前半の句群から

妻祷る真黄色なる夕焼けに／夏痩せの妻や外国人と祷る／母姉と祷りの前を手毬の子
祈りの身もだえ金木犀に頭突入れ／厭人の果ての祷りも咳混じり
墓地中にも花奈畑や母を祷る／祈りの前の距離が消えゆき夏薄暮
犬ふぐり祈らぬよりは祷りしげし／何時が有縁者の有縁に生きよ薔薇に祈る
薔薇に祈る僧が簪買ふが如／食後の真水聖夜の吾子等祈り初む
身は幸運謝しつ祈れと聖夜妻

近代俳句は、正岡子規の写生論とともに始まったが、その写生論は虚子に継承されることで主客合一という性質を帯びてきた。自己の深い洞察力で眼前に起こる現象を詠むというのがその主旨であるが、草田男はそれを自分の内的動機に合う現象に焦点を合わせて詠み込むという考えへと押し進めた。虚子とその弟子草田男が説く合一論は、同じ主客合一ではあっても、アプローチが違う。虚子は、あくまでも現象が優先され、それを見るための洞察力の研鑽が肝要で、草田男はまずは自分の内的動機によらなければ現象が見えてこないとしている。となると、前半に見られる現象にはどのような内的動機があったのだろうか。

ちなみに、キリスト教でも主客合一を説くグループが存在する。日本の禅宗と比較研究されている神秘主義思想家である。ここで、草田男の主客合一の仕方が神秘主義思想の方法に類似していることを指摘しておく。次に掲げる一文は、カトリック詩人アンゲルス・シレジウスのエピグラムである。

In sich hört man das Wort

Wer in sich selber sitzt, der höret Gottes wort,
Vernein es, wie du willst, auch ohne Zeit und Ort.

（自己の内面に言葉を聴く。
自己の内面にいる人は、自分の意志と関係なく、時間や空間とも関係なく、神の言葉を聴く。）

これらの句には、「妻祷る」「母姉と」「食後の」見られるように、現象の主体は自分の家族である。祈りの主体に自分の身辺に一番近い存在を置くということは、その分物理的には精神的にも「祈

る」行為そのものが自分の近辺にあるということを表しているといってよい。だが、彼は「しめりし沓に足指緊り復活祭」の自句自解に、「私自身はカトリック信者ではないが、他の家族達が総てそうなので、クリスマス以外にも復活祭の折には、私も彼等に同伴して礼拝堂の一席に身を置く」[14]といった記述が複数見られることから、家族とはいえ「祈る」存在であるとしては明らかに自分と距離を置いていることが分かる。そこに、「祈る」という行為一つをとってみても、これらの句に関して述べると、必ずしも主客は合一しているかどうかは定かではない。むしろ、信仰の世界とは一線を画したいとする句であるとさえいってよい。

その一方で、「祈りの身」「墓地中にも」「祈りの前」「何時が」といった句群の主体は草田男自身であり、対象はルオーの絵であり母親である。特に「祈りの前」では、祈る主体と祈る対象の距離が確実に合一の方向へと導かれていることが分かる。だが、「祈りの身」においては、「身もだえ」しながら祈っている。また、「身は幸運」の句では、キリスト教の「祈り」には、「祈願」のみならず「謝意」を込めてするものだと諭されている。このことから、祈りについて率直で直向にといった印象を受けないにしても、「祈り」を通してキリスト教へと向かおうとしていることは事実であるようだ。この微妙なキリスト教との距離感を宮脇氏は「求道の模索」と表現した。

後半の句群から

祷の前を飛燕の迅きこと一度／浅間の巨虹われや七重の祷なす
指ぬくき冷えし指組み祈りたる／春の兆妻の祈祷の朝の燭
梅真白生者を祈り故人に謝す／唖蝉の夕の座遠妻の祈る姿／冬の祈身の体臭の場を去りて
冬の祈人黙し魚口うごく／真先かけて聖母に祈る晩涼ぞ

「浅間に巨虹」（1965年昭和40年）について、他にも虹に関する句を並べてみると、

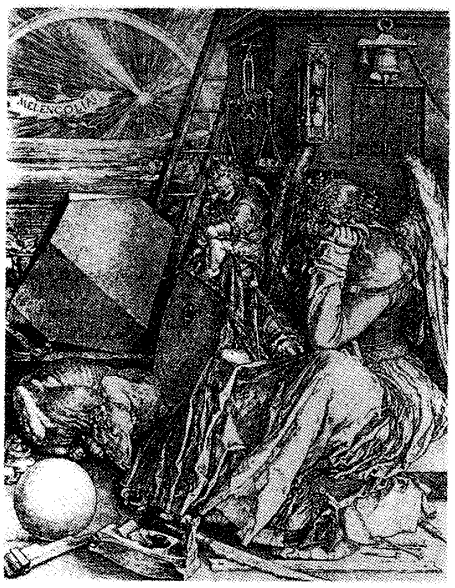
虹の後新月出でけん「洪水以後」　（1957年昭和31年）
赦されの証の虹の今か爆ずる　（1965年昭和40年）
めぐりあひやその虹七色七代まで　（1978年昭和53年）

といったものがあり、どれも旧約聖書の契約の印としての虹である。宮脇氏の指摘によると、妻直子が熱心なカトリック信者であったのに対し、草田男のキリスト教的関心は教会よりも聖書の記事を教養として取り込んでいた。確かに、「虹の後」には聖書の世界そのものを提示しているが、主体としての草田男の姿が見えにくい仕上がりとなっている。それに対し、「浅間の巨虹」の方は、俳句としての仕上がりよりも、主体である草田男が祈りを連想したことを率直に述べていることに気付かされる。更には、「めぐりあひや」では虹を通した出会いが長く続いてほしいという願望が句に直截表現されている。

ちなみに、草田男の群作「メランコリア」[15]は、中世ドイツの画家・版画家のアルブレヒト・デューラーの銅版画「メランコリアⅠ」[16]を見て詠まれたものだが、この版画にも虹が描かれている。

草田男は、その画の虹について「虹は神の、オーロラは存在の誓約か」と詠んでいる。そして虹には「『虹』現象はノアの洪水直後の神の誓約。」という注釈が施されている。このことからも、草田男にとって虹は明らかに旧約聖書創世記９章12節から17節までの箇所と直結していることが分かる。すると、浅間山にかかった巨大な虹についても、やはり７度にも及び神への祈りに結び付くのである。

また、前半部において、妻直子から指摘された「謝しつ祈れ」という教訓は、自分なりに祈りとともに謝意を盛り込むといった具合に生かされていることが分かる。妻から諭された祈りを自分のものとしようとしている草田男の姿がそこにある。



デューラー作「メランコリア」1514

ところで、「冬の祈人」に見られる祈りは沈黙のもとに行われている。「沈黙（das Schweigen）」について次の引用を含め、シレジウスは多くのエピグラムを残している。

Das stillschweigende Gebet

Gott ist so über alls, daß man nichts sprechen kann,
Drum betet du ihn auch mit Schweigen besser an.

（沈黙の祈り

神はあらゆるものを超えているので、人間は神について何も語ることはできない。だからあなたも神に向かって沈黙をもって敬うがよい。）

日本ではキリスト教作家遠藤周作の『沈黙』が有名であるが、作品中、神は沈黙を守る存在であることが繰り返し強調されている。言葉を超えた神へと繋がるためには、自らも黙して祈るべきであるとする上記のエピグラムの世界に、草田男の句は通じるものがある。

7　謝す（謝意）に関する句

「祈る」の字義は、「神仏に自分の幸福や長寿（あるいは他人の不幸）を希求する」ということにある。すなわち、先述したキリスト教の祈りとは趣を異にする部分がある。それは、祈りに謝意が込められているかどうかである。日本の祈りには、謝意がない。それは漢字の構成を見る限りにおいても明らかである。一方、キリスト教の祈りには謝意が込められているので、本来ならばこの句に関する考察は、「祈り」に関する句の中に含めなければならない。だが、草田男の句には、「祈り」とは別個に「謝す」という句がいくつか登場している。先ほど妻から指摘されたことにも関係するが、草田男にとって祈りと謝意は別個のものであったと考えるべきなのか、それとも謝意を前

面に打ち出すべく作句したのかという両面について考える必要がある。

クリスマス妻生みし父母の霊に謝す
夏の昼餉の燭火や共に今日を謝す
命を謝す聖夜に沈黙せる神へ
償へよと寒鴉謝せよと山鳩鳴く

Man soll für alles danken

Mensch, so du Gott noch pflegst um dies und das zu danken,
bist du noch nicht versetzt aus deiner Schwachheit Schranken.

（あらゆるものに感謝すべきである。
人よ、弱気になって自分に囲いを作るようなことをしなければ、あらゆることであなたは神に感謝するようになる。）

草田男は、自分の立場を『長子』[17]の跋文で「昨日の伝統」に眠れる者すなわち守旧派でもなく、「今日の新興」に乱れる者すなわち新興俳句運動に率先して加担するものでもないという、いわば中道の立場をとってきた。単なる花鳥諷詠では満足せず、かといって無季自由律や時流の波に安易に乗ってしまうこともなく、彼はひたすら人間性の追求つまり人間の探求を怠らなかった。そのため、両面からの批判の的となり、反論が出されるごとに論争を繰り返さねばならなかった。自分の壁を作らなければ安逸して作句できなかったという運命を自らが選び取ってしまったこともあったのではなかろうか。だが、このエピグラムにある通り、先述した晩年のキリスト教句数の微妙な上昇は、もはや周囲に対して囲いを作る必要がなくなり、自分の求道のための作句活動を専念することにした。ゆえに、素直に感謝を句に盛り込むことができるようになったのではないか。

さて、最初の句は、先述した「梅真白」の句において謝す対象が「故人」となっている。この感謝は、御子が生まれるクリスマス（聖夜、降誕祭）、父母により生を受けた女性と結婚生活を送っていることに対して向けられている。もはやその両親も天に召されているので、ここでは故人の霊（die Seele）に対して感謝している。ここでは、単なる先祖崇拝との解釈も許容範囲だとすることも可能だ。だが、この句は1963年（昭和38年）に作られていることから、処女マリアから救い主が「誕生した」ことと、重ね合わせて理解した方がよい。また、「命を謝す」も同様で、今神によって生かされている自分の命を沈黙している神に感謝していると考えることができる。

おわりに

「祈り」の関する句では、主体が家族であり、その家族の描写でしか表わせなかった「祈り」が晩年、自分の祈りそのものへと変化して草田男の姿をみることができた。また、「謝す（謝意）」に関する句では、素直に神への謝意を込めて作句できるようになったことが分かった。

次回は、「罪」に関する句について考察する。彼が何を「罪」と感じ、その「罪」をどう詠んだのかを考えることによって、カトリック俳人としての草田男の輪郭をより明確にしていきたい。

注釈

---

1 泉紫像『萬緑叢書　中村草田男』株式会社うつのみや　2001年
　グラスは49頁参照

2 Angelus Silesius: Cherubinischer Wandersman
　Sämtliche Poetische Werke in drei Bänden. Carl Hanser Verlag. München. 1949.
　植田重雄・加藤智見訳『シレジウス瞑想詩集』岩波文庫　1992年
　引用したのは、以下の箇所である。
　In sich hört man das Wort（自己の内面に言葉を聴く）第１章93
　Das stillschweigende Gebet（沈黙の祈り）第１章240
　Man soll für alles danken（あらゆるものに感謝すべきである）第１章91

3 泉紫像『萬緑叢書　中村草田男』55～56頁

4 中島賢介『青畝・静塔・草田男比較俳句論』北陸学院短期大学紀要第35号

5 宮脇白夜『中村草田男論　詩作と求道』みすず書房　1987年

6 浅見洋『西田幾多郎とキリスト教との対話』朝文社　2000年

7 景山筍吉『マリア讃歌』草紅葉会　1976年

8 宇田進編『新キリスト教辞典』いのちのことば社　1991年

9 Nietzsche, Friedrich: Also sprach Zarathustra. Kritische Studienausgabe Herausgegeben von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. DTV. München 1999. S. 227-228.
　氷上英廣訳『ツァラトゥストラはこう言った』上・下　岩波文庫　1967年

10 信田正三訳『悦ばしき知識』ニーチェ全集８　ちくま学芸文庫　1993年

11 『中村草田男全集』別巻　みすず書房　1991年　50頁

12 同上　第１巻

13 同上　第２巻

14 同上　第６巻　365頁

15 同上　第４巻

16 次頁

17 『中村草田男全集』第１巻　みすず書房　1991年